

基本情報 ■作者：佐久間鉄園(1850～1921) ■時代：明治～大正時代

■寸法：縦199.0cm 横43.8cm

この資料のココがすごい!!

掛軸に描かれた鍾馗は、悪神を追い返す強力な神様としてみられ、鍾馗の画像を飾る呪法が行われました。本資料を飾れば、厄災から身を守ってくれるかも!

お気に入りポイント

作者の佐久間鉄園は鍾馗を彩色せず、黒の肥瘦・濃淡を使い分けて描いています。髭や衣冠など濃淡をつけて描き、描線は長く流れるように力強いです。強い者の権化・象徴とされる鍾馗の威風が伝わってくるような作品。

学芸研究員の目



学芸研究員
安保 智

鍾馗を厄除けの守り神とみる信仰は、中国の故事に基づいています。佐久間鉄園は東洋絵画の源流地である中国を自分の眼で確かめるため、中国各地を周遊し、画法を研究したようで、中国の有名画家の伝記や代表作の論評も集めていました。鉄園は、明治期の西洋美術の導入に対して保守的な立場を自認し、日本画の伝統を重んじて、東洋絵画の古い画題を好んだ人物として知られます。鉄園の画家としての人生に大きな影響を与えた中国歴遊の経験が本作品にも生かされているのでしょうか。

「こどもの日」に現れる
厄除けの神様

鍾馗とは

鍾馗(しょうき)は、中国の疫病除けの守り神で、長い髭を蓄え、大きな目で何かを睨み付けている姿が印象的である。中国では故事にならない、古くから「端午の節句」に鍾馗を描いた黄色の紙を家の門前に貼って魔除けにしていた。その風習は日本にも伝わり、「こどもの日」には、のぼりに描かれ、五月人形として登場するなど馴染みが深い。江戸時代中期以降、諸画家が題材として取り上げることが多くなり、狩野探幽や富岡鉄斎の鍾馗図が有名である。

佐久間鉄園の人生

本作品は、嘉永3年(1850)に仙台藩で生まれた佐久間鉄園(さくま てつえん)の作である。鉄園は、仙台藩の御用絵師であった晴岳(せいがく)の子で、幼い頃から父の下で絵を描き、その才能を発揮して将来を嘱望されていた。しかし、鉄園が成年を迎えたとき、明治維新によって藩制度は崩壊し、仙台藩に仕えた人々は家禄を失って、佐久間家は絵師としての生活が成立しなくなる。それに加えて、鉄園の画風は明治政府の官吏らが好む南画風ではなく、狩野派の正統を受け継いだ北宋風であった。鉄園は画家の道を諦めて、政治家の道を志したが、薩長政権下で東北出身者が活躍する場はなく、函館で新聞記者としての生活を送る。後に父と兄得楼が亡くなり、仙台

藩画員であった佐久間家が凋落してしまったように思われたとき、竜池会(後の日本美術協会)^{*1}に所属する狩野派の下條桂谷(げじょうけいこく)との出会いを契機に、画家として再出発を果たす。鉄園は、明治維新後の極端な西洋美術の導入に対し、日本固有の美術の復興を目指していた竜池会の活動を支持し、自らもその展示会に出品を行うようになると、次第に実力を認められていった。後に鉄園は文展^{*2}の審査員に選出され、日本美術協会の元老的な存在として影響力を強めていく。

仙台藩最後の御用絵師の末裔として近代初頭を生きた鉄園は、時代が流れて社会が変質していくなかで、紆余曲折を経て画家として活躍した苦勞人である。鉄園の地元である仙台には、彼の作品が多く残されており、鉄園が亡くなった後も、仙台の人びとが彼の作品を愛し続けていることを物語っている。

学芸研究員 安保 智
実習生 大友 りん

参考文献
仙台市史編さん委員会編『仙台市史 特別編3 美術工芸』仙台市 1996
仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編6 近代1』仙台市 2008

用語解説 詳しくはP27へ

*1 日本美術協会
*2 文展